

「愛情マニア」

塔子 由利 牧 桐沢 夕美 愛子 咲倉 サツキ

今日は朝まで雨だった。

おかげで部屋は湿気が充満している。

塔子の部屋。

部屋は片づいておらず、大変汚い。

塔子は缶ビールのタブを起こす。

缶ビールに口を付けて、飲む。

塔子　はあーっ。暑いわあ。

カーテンを開けて、窓を開ける。

窓の外を見る。

高いビルと高いビルに視界が狭くなっている。

その間に、空が見える。

塔子　開けても全然涼しくないなあ。

塔子は空を見ながら、ビールを飲む。

狭い部屋。

缶ビール。

見えにくい空。

塔子は空を凝視する。

窓から身を乗り出して、上の方を見る。

塔子　まだかなー。

塔子は時計を見る。

塔子 もうすぐかなー。

塔子は窓際にテーブル代わりの台を置いたり、イスを置いたりする。
なにやらウキウキして準備をしている。

部屋の真ん中。

そこには一人の男が座っている。

両手はガムテープでぐるぐる巻きにされている。

由利 あー。

塔子 え？

由利 なに、これ。

塔子 え、なにって？

由利 いや、なにって、って。

塔子 どしたん？

由利 まずこれなんやねん。

由利はガムテープで巻かれた両手を見せる。

塔子 ガムテープや。

由利 なんで縛られてるねん。

塔子 手はな、油断したらあかんやん。

由利 聞いてないねん、そんなこと。

塔子 だって、縛ってなかったら逃げるやろ？

由利 …じゃあ、ここどこやねん。俺、なんでここおんねん。

塔子 ここは、あたしんち。なんでおるって…あたしが連れてきたから。

由利 …あんた、誰？

塔子 …うーん。ただの女の子。

由利 はあ？

塔子 あ、ちやうわ。ただのOL。

由利 …なんでただのOLが。

塔子　じゃあ、きみ、誰？

由利　はああ？

塔子　なんていう名前？

由利　俺のこと知らんのに連れてきたってこと？

塔子　知ってるよ。たまに、見たもん。

由利　…は？

塔子　ここ、下、よく通ってるやろ。

由利　え？

塔子　窓からな、きみが通ってるの、見えるねん。

由利　…ああ、通学路かな。

塔子　あ、やっぱり学生？

由利　え、それさえ？

塔子　あそこの大学やろ。

由利　……。

塔子　やっぱりなあ、やっぱりやー。

塔子は嬉しそう。

置いたイスの角度を変えたりする。

由利　何してんの？さつきから。

塔子　もうすぐ、はじまるから。

由利　え？

塔子　あ、そや、きみ、名前は？

由利　……。

塔子　…あ、そっか。そうそう。

塔子は言うってから、部屋の隅に置いていたかばんを持ってくる。

由利　あ！俺のかばん。

その中から、塔子は学生証をとり出す。

塔子 あったあった。

由利 ちよつと！

塔子 …よし？…ゆう？…なんて読むの？

由利 …「ゆり」。…わかるやろ。

塔子 へえー！珍しいね。…「ゆり」…いい名前やね。

由利 名字ですけど。

塔子 じゃあ由利くん。

由利 ……なに。

塔子 これからよろしくな。

由利 …は？

塔子 あああ、かわいいなあ。由利くん。

由利 え？

塔子は由利のそばに寄り、頭をなでる。

由利 ちよつと？

塔子 由利くん。あたしな、由利くんを見てたよ。この窓の下を通る由利くん。平凡な感じの由利くんを。

由利 ……え。

塔子 たまに上見るねんな。由利くん。じーつと。何見てるんかと思ったら、飛行機飛んでんねん。じーつと見てんねん。ビルで見えへんくなるまで。なんで見てるんかなーって思っつて、飛行機通つたらあたしも、見るようになってもた。この辺、よく飛んでるねんなー。知らなかった。

由利 ……。あ、そうですか…。

塔子 これっつて、恋かなあ？

由利 はあ？

塔子は由利を立たせて、窓のそばに座らせる。

塔子 そう、きつとそうやわ。

由利 あの、酔ってる？

塔子 そうかもねえ。今、世界はあたしに味方してる。

由利 え？

塔子 あたしは、由利くんと一緒に見たいと思ってるん。

由利 は？なにを？

塔子 今日、花火大会。

窓の外で花火があがる。

塔子 あっ！

塔子は窓の方へ駆け寄る。

塔子 嬉しいなあ。

塔子はもう一つのイスに座る。

塔子はビールの缶を開ける。

それを由利の前に置く。

塔子 どうぞ。

由利 いやいや。

由利は縛られている。

花火が上がる。

塔子は花火を見ている。

由利も見る。

塔子 きれいだなあ。

由利 うん、まあ…。

塔子 夏の好きなどこ、これだけ。

由利 これだけ？

塔子 うん、普段は暑いし、いいことない。

由利 ふーん。

由利はビールを飲みたくてガムテープを取りたくて身をよじる。
でも上手くはいかない。

塔子は窓の方を見ている。

塔子 あ。

由利 え？

塔子 見て。飛行機。

由利 …ああ。

塔子 すごいね。花火の中を。

由利 中ちやうやる。飛んでる高さちやうねんから。

花火が上がる。

塔子 中の人、どんな風に見えてんのかな。花火。

由利 だから見えへんって。

塔子 だって、花火の中通ってるやん。

由利 通ってへんって。そう見えるだけで。

塔子はビールを飲む。

塔子 あたしなー！こんな日が来るなんて思ってなかったん。

由利 え？

塔子 好きな人と一緒にこの部屋から花火を見れるなんて。…あんな、あたしの毎日は、めっちゃつまらん毎日やねんけど。

飛行機が通る。

塔子 この部屋、ずっとひとりで住んで。あたしはあたしだけの世界を楽しんでるつもりやった。でも実際は、毎日毎日うだる暑さにやられてるみたいに、怠惰に同じことを繰り返してるだけ。月曜日、いやいやながら仕事行って、火曜日水曜日木曜日、週末のことを夢見ながら、失礼な客からかかってくる電話を取って、金曜日、やっと来る週末に何しようか思いをめぐらせて、土曜日日曜日は結局何もしないまま終わって。あたしはこの部屋で、洗濯物をたたんだり、あらいものをして、寝るだけ。なにも起こらない、なんの変化もないこの部屋で、あたしは唯一の抵抗として、ものを増やす。今日買ったもの、今日拾ってきたもの、今日のもの。でも、それも結局どうでもいいものばかり。結局、このうだる日常に取り込まれていく。

ちなみに、飛行機の中では、乗客はきつとおとなしく、平穩に目的地に着くことだけが心にある。

想像するに、飛行機の中では、例えば親子がいる。

親は「紙」を触るのが好きで、飛行機の中でも自分のコレクションを見て落ち着いている。

子は親の肩に身を任せて、すやすや眠っている。

例えば、学生も乗っている。

学生は絵を描くのが好きで、こっそり落書きして楽しんでいる。

一組の恋人同士も乗っている。

男と女は手をつなぎ、他愛もない話をしている。

恋人に会いに行く女も乗っている。

女は遠距離恋愛の相手の男を思っ自分の身だしなみを整えるのに余念がない。

この飛行機が、本当に花火の中を飛んでいたら？

塔子 そんな乾いた生活が、恥ずかしながらあたしの世界。でも最近、この世界にウロコが落ちた。あたし、これをあたしの手の上でじっくり見てみたい。

花火が上がる。

飛行機に当たる。

飛行機は揺れる。

塔子 この窓の下を通る、あたしの気持ちを引っぱる大学生。それがあたしの世界のウロコ。

花火が上がる。

飛行機に当たる。

飛行機は揺れる。

塔子 この衝動。ドキドキして、ドキドキして仕方ない。こんなに心臓を動かすものがあるなんて信じられなく

て、日に日に「どうしても」「どうしても」の言葉の数が増えていく。

花火が上がる。

飛行機に当たる。

飛行機はさらに揺れる。

塔子 その先は想像出来ない。あたしの世界がどんな色になるか。でもあたしは、この大学生を……

花火が上がる。

飛行機に当たる。

飛行機はひととき大きく揺れる。

乗客 おちていく……！

それは、塔子の日常も一緒に。

引力と重力に引っぱられて。

塔子の部屋。

かなり散らかっている。

塔子はいない。

由利がいる。

由利の首に首輪がついていて、部屋の一角につながれている。

由利は布団にくるまり、寝ている。

部屋の壁に5センチ四方の穴が突如開く。

そこから誰か覗いているよう。

その穴がまた突如閉まる。

しばらくして、扉の前に人が来る。

その人が鍵を開けている様子。

鍵を開けて入ってくる。

咲倉 ……失礼します。

と言ったが、誰もいないことを知っている。

(由利が寝ていることには気付いていない。)

咲倉は部屋に上がり込む。

咲倉は腰に、紙の束をつけている。

部屋の中央に座り、その紙束を大切そうにめくる。

咲倉 エへ…。

咲倉は部屋を見渡す。

散らかっている床の上にあるものを拾い上げ、見る。

その中に、紙を見つけると、それをじっくりと見る。

匂いを嗅ぐ。

咲倉 あかん。

咲倉はそれをポイツと捨て、また床にあるものを捨てる。

今度見つけた紙をまた念入りに眺める。

嗅ぐ。

咲倉 これ。これ。

咲倉はその紙を、腰の紙束に付け加える。

咲倉 エへへ。

それから、また部屋の中をウロウロする。

由利の寝ている布団を引っ張る。

寝ている由利を見つける。

咲倉 うわあー!!!

その声で、由利が起きる。

由利 ……塔子さん？（咲倉を見る）…誰！？

咲倉 えっ！えっ！えっ！えっ！

由利 え、ど、ドロボー！？

咲倉 いやいやいやいや！

由利 え、じゃあ。あっ！塔子さんのお父さんとか。

咲倉 えっ！えっ！はい。

由利 えー！まじですか！すみません。ドロボーとか言うて。

咲倉 いやいやいやー？

由利 あー…今何時…。（時計を見る）

咲倉 え、…えっと。えっと…。

由利 え？あ、塔子さん仕事ですよ。帰るんは多分6時くらいです。

咲倉 あ、うん。はい。

由利 まあ、ゆっくりしてってくださいよ。俺もつかい寝ますわ。

咲倉 あ、うん。はい。

由利はもう一度布団にくるまる。

咲倉 ……。え、だ、誰…？

咲倉はそろりと立ち上がり、玄関に向かう。

扉を開けようとしたとき、また扉が開く。

咲倉 うわわわわ！

咲倉は部屋の中にまた戻ってうろたえる。

サツキ ちょっと。おとーさん？何してんの？

咲倉 …あ、サ、サツキ。

サツキ いくら管理人でも勝手に入ったらあかんやん？

咲倉 いやいやいや、ちやうちやう。

サツキ は？

咲倉 じゅ、住人の安全を守る…とか、そういう、はい。

サツキ …それで、勝手に入ってもいいの？

咲倉 …はい、駄目です。

サツキ そやろ？

サツキは部屋の中を見渡す。

サツキ 誰もおらんで良かったな。

咲倉 え、えっと。

咲倉は由利の方をチラチラ見る。

由利は布団にくるまっているので隠れている。

サツキ おとーさん、この人、帰ってくる前に早く帰ろ。

咲倉 う、うん。でも…。

サツキ おとーさん！ケーサツ、つれてかれるよ！

咲倉 エッ！エッ！？ケツケーサ！

咲倉は慌てて混乱する。

サツキ ああ、ごめん。おとーさん。

サツキは慌てて駆け寄る。

(土足)

サツキ 怖い言い方したな。ごめんな。ただ「アカンことやで」って言いたかったん。

咲倉 アカンことやで。

サツキ うん。そう。でも大丈夫。…あたしが、つれて行かさんからな。

咲倉 う、うん。

サツキは咲倉に近寄り、咲倉の服の乱れを直す。

サツキ だから、あたしから離れたらアカンで？

咲倉 う、うん。

サツキ あたし、もう、おとーさんしか、おらんねんから。

咲倉 う、うん。

サツキ な…？

サツキは咲倉の手を取り、自分の指を絡める。

そのまま2人は出ていく。

扉が閉まったあと、由利が起きる。

由利　誰やねん。…まあ、いいか。

由利はそのまま窓の方を見る。

平和な青空が見える。

由利　…ヒマやなあ。

由利はつながれているロープを引っ張ったりする。

切ろうとしても切れない。

首輪には鍵がついている様子。

由利　鍵か…。嚴重やなあ。

色々試してみるが、どうもやっぱりこのロープを抜け出すことは無理そうだ。

携帯電話も取り上げられている。

ヒマだ。

由利は部屋に落ちている紙を拾い、紙ヒコーキなどを折る。

由利　あーっ、ヒマ！…なんかこれはもう脳内で遊ぶしかないな…。…あ、さっきの2人のこと想像しよ。え

ーと…。そうやなあ。あれは、本当は本当にドロボウで、ドロボウの親子で、っていうのはどうや。で、

飛行機で高飛び。

もう一度、由利は紙ヒコーキを折りはじめる。

由利は想像する。

飛行機の機内。

サツキと咲倉が乗り込んでくる。

咲倉 高飛びやな。

サツキ そうやで。

咲倉 高飛びってなんかかつこええな。

サツキ ちよつと、おとーさん、今日のごはんどーすんの？

咲倉 あ……。あつ！機内食でるんちやうかつたつけ！

サツキ えーっ！そんなんイヤ！おとーさんが見つかつてまうから悪いんやで！もう、ケーサツにつかまるわ！

咲倉 エッ！エッ！……ケーサツ署！刑務所！牢屋！麦ごはん！イヤ！

サツキ あたしもイヤやわ！……おとーさん、逃げ切るで！

咲倉 ……サ、サツキ……！ま、まぶしい……！

サツキ ハイジャックするで！

咲倉 サツキ、ただのドロボウには大胆すぎるで！

由利 あ、でも、ドロボウじゃないと言うてたし、じゃあ……悪徳リフォーム業者とかちやうか。

飛行機の中のサツキと咲倉が話し合う。

サツキ おとーさん、機長、うまいこと騙されへんかったなあ。

咲倉 しゃーないやん。若い男やってんもん。

サツキ そうやなあ。若い男はリフォームに興味がないもんなあ。

咲倉 そうや。それにここは飛行機やからな。

サツキ 飛行機はリフォーム出来へんもんなあ。

咲倉 せやろ。

サツキ じゃあ次は家狙うで！

咲倉 サツキ、ほんま、それしかないわ！

由利 ……とか言うて降りたらええねん。

サツキと咲倉の妄想をやめる。

由利 ……って、俺アホか！（つつこむ）

由利はぼんやりと窓の方を見る。

飛行機が通過する。

由利は窓の方に近寄ろうとする。

首につながれたロープが窓の長さまでない。

由利 痛っ！……もー……。あーあ。

もう飛行機は見えない。

また扉の方で鍵を開ける音がする。

しかし、先ほど鍵は開いたままになっているので、鍵が閉まる。

塔子の声 あれ？

もう一度鍵を開ける。

扉が開く。

塔子 タダイマー！

由利 ああ、塔子さん。

塔子 ごめんなー！待たせてー！

由利 めっちゃ早いやん。どうしたん。

塔子 早退してきた！

由利 は？

塔子 だって由利くん待ってると思ったらもう仕事なんかしてられへんし。

由利 え？そんなん大丈夫なん？ほんで別に待ってへんし。

塔子 またまたー。かわいいなあ、由利くんは。

由利 や、ほんま。

塔子 あ、そや。な、あたし鍵締めてけへんかったっけ。朝。

由利 締めてっただ。

塔子 あれ？さっき開いてなかった？え、由利くん届くん？玄関まで。まじでー？ちょっと長かったかなあ。こ

のヒモ。

由利 届かんよ。さっき、おとーさんていう人が来たから。

塔子 へ？

由利 鍵開けて入ってきたきはったんちゃう。

塔子 ええ？

由利 俺寝てたから、入ってきたのには気付かんかったけど。

塔子 誰なん、それ。おとーさんて。

由利 さあ、俺にはわからんけど。

塔子 そんなわけないやん。お父さん、おらんのに。

由利 へえー。じゃあ、誰やろね。

塔子 ええー？気持ちわるー。由利くん夢でも見てたんちゃうん？

由利 そうかもな。

塔子 なんやー。じゃやっぱり由利くんが開けたんや。

由利 ……そうかもな。

塔子 もうー！やっぱりもつと短くしなあかんな！

由利 ……そうやな。

塔子はウキウキしながら由利の目の前に座る。

由利 なに。

塔子 由利くん。

塔子は由利の顔をなでる。

由利 なにーさ。

塔子 かわいいなあ。由利くん。

由利 ……。

塔子 ずっとここにおってな。

由利 ……あの、いつ出してくれんの？

塔子 え？出たいの？

由利 俺、学生やし。単位とか。

塔子 ……夏休みやろ。

由利 ……まだやけど。

塔子 由利くんのテストは終わってる。

由利 ……何調べてんの。

塔子 エへ。由利くんの手帳見ちった。

由利 ちょっと。

塔子 ここにおったらいいから。

由利 ……勝手やなあ。

塔子 だって、好きやから。

由利 ……。

塔子 そや、これ、着て。

由利 なに、この服？

塔子 今日、帰りに買ってきてん。絶対由利くんに似合うと思って！

由利 ええー？

由利は塔子に出された服を着る。

塔子 かわいいっ！

由利 ええー？

塔子 あ、ほんで、これ食べ。

由利 なに、これ。

塔子 生プリン。

由利 なんで？

塔子 いやー、由利くんに食べさせたくなくて。

由利 ええー？

塔子はプリンの方を開け、スプーンをとり出し、由利に手渡す。

由利はおとなしく一口食べる。

由利 …おいしい。

塔子 …ほんまー？よかった。

由利はプリンを食べる。

塔子はそのそばに座り、由利の頭をなでている。

そのとき、玄関のチャイムが鳴る。

塔子 …はあ！？

由利 …誰か来たで。

塔子 …もう、ええわー。無視無視。

もう一度鳴る。

塔子 …もう！

由利 …出ーや。うるさいし。

塔子 …ああ、もう！

塔子は立ち上がり、玄関まで行く。

塔子 …はいー！？

玄関を開ける。

咲倉 …あ、あの。

塔子 …なんや、咲倉さん。

咲倉 …あ、あの。これ。

塔子 …なに？ちよっと忙しいんで。

咲倉は手提げ袋を手渡す。

咲倉 あの。あげます。

塔子は袋の中身を見る。

塔子 …また、紙。…あの、あたし、こんなんもらっても仕方ないねんけど。

咲倉は袋を押し付ける。

塔子 …はいいい。わかりました。ありがとうございます。

咲倉 …エへへ。

塔子は袋を受け取る。

咲倉は満足げにする。

何度も振り返りながら、去る。

塔子は扉を閉める。

塔子 なんなんよ、もうー。

塔子はもらった手提げ袋を部屋の中にどさっと投げ置く。

由利 なに？

塔子 紙。

由利 かみ？

塔子 なんか、いっつもくれるねん。

由利 そんなに大量？

塔子 うん。

由利 あの人、おとーさん？

塔子 なわけないやん。なんで今の会話で。

由利 そうやんなー。

塔子 このマンションの管理人。咲倉さん。ちょっと変わってるねん。

由利 変わってるよなあ。

塔子 昔、製紙工場で働いててんて。

由利 だから、紙。

塔子 機械の事故に巻き込まれたとかで…って悲劇なんはわかるけど！

由利 えー。こわー。

塔子 このマンションに住んではるから、ゴミの日に捨てようと思ってもなんか見張られてる気がして。

由利 塔子さんのこと好きなんちゃう。

塔子 ええー？あの人子供おるでー。べつたりの娘が。

由利 ああ。

塔子 子供おらんでもイヤやけど！

由利 ……そのまま言わんでも。

塔子 しゃーないやん。あたしの心は、もう由利くんだけやから。

由利 ……あー、はいはい。…何回も言われると、信憑性薄れるんやけど。

由利は布団を頭からかぶる。

そのとき、またもや玄関のチャイム。

塔子 もーっ！なんなん！

塔子は玄関に行き、扉を開ける。

入ってきたのは、桐沢。という男。

と、夕美。という女。

2人は手をつないでいる。

塔子 うわ、夕美。

夕美 き、来ました。

桐沢 こんにちは。塔子さん。

夕美 ウフ、桐沢さん。さっきまで会社で会ってたのに。こんにちはって！

桐沢 ナカナカ良いでしょう？

塔子 ……なにか？

夕美 あの、塔子さん体調悪くて早退したって聞いて、心配して。

桐沢 そうですよー、大丈夫ですか？

塔子 いや、大丈夫やけど。

夕美 桐沢さん、あがらさしてもらお。

桐沢 そうですね。せっかく来たわけですし。

夕美 失礼します…。

2人は部屋に上がり込んでくる。

桐沢 うわー。塔子さん、相変わらず汚いへやですねえ。

夕美 いやー、増してるわあ、これは。

桐沢 増してますか。

夕美 増してます増してます。

2人は笑う。

塔子 なに？なんなん？

夕美 あ、特に。

桐沢 用事はないです。

夕美 な、桐沢さん。

塔子 …もー、またなんー？。

夕美 またって？

塔子 もう、用もないのに来んといてーや。

夕美 なんでなんで？あたし、気遣ってるねんで？

塔子 はあ？

桐沢 夕美さんがね、提案してくれてるんですよ。塔子さんち寄ってこうって。

塔子 なんで？

夕美 (こっそり) 塔子さん。桐沢さんに、会いたいわけやろ？

塔子 はあ？？

夕美 (こっそり) だって、塔子さん、桐沢さんに…コ、コク…ったわけやろ？

塔子 …え…。

塔子は驚いて桐沢を見る。

桐沢はしらじらしい感じ。

夕美 ごめんやったな、塔子さん。あたしと…き、桐沢さんのこと…ウフ…知らんかったんやんなあ。

塔子 いやいや、もういいで。そんなん。

夕美 や、無理せんでいいわけ。あたしには、こうやって、塔子さんに桐沢さんと会わせてあげることしか、出
来へんねから。

塔子 うわー。だいぶいらんわ。見せつけに来てるだけやろ。

桐沢 僕はね、夕美さんがかわいそうかなって思ってるんですよ。

夕美 桐沢さんー！そんなことないない！塔子さんの方が、かわいそう、やわあ。せつないわあ。

塔子 ちょっとちよつと、あんたたち。あたし、最近そんなこと忘れてたから。もう気つかわんというて。

夕美 えー？

桐沢 またまたー、塔子さんこそ、僕等に気つかわんでいいですよ。

夕美 そうやでー。

桐沢 夕美さんの好意なんですから。

夕美 ウフフー。

塔子 や、ほんま。もう、桐沢さんのこととか、今思い出させられた、て感じよ。

桐沢 え？

夕美 塔子さん、うそうそ…。

塔子 ううん。ほんま。

桐沢 いやいやいや、塔子さん。無理、しなくてもいいんですよ。

夕美 塔子さん、そんなうそうそ…。

桐沢 いやいやいや、塔子さん。気遣ってるだけですよね？

塔子 いやー？へへへー。

塔子是由利のくるまっている布団に近寄る。

桐沢 いやいやいやー。

桐沢はなにやら動揺している。

塔子は布団をはぎ取る。

由利 …うーん…？

由利が起きる。

夕美 !

桐沢 あれ？

塔子 じゃーん。

由利は3人に注目されていることに気付く。

由利 あれ？お客さん？

塔子 うん。あいさつして。

由利 どうも。

夕美 ……ど、どうも…。

桐沢 あ…あれれれれ？塔子さん。

塔子 うん？。

桐沢 男がいます。

塔子 うん。由利くん。

夕美 え、…とととととと、塔子さん。…いつから、こんなん？

塔子 うん、昨日から。

桐沢 昨日から？

塔子 うん。

桐沢 弟さんかなにかですか？

塔子 ううん。ただの大学生。な。

由利 うん。どうも。

桐沢 ただの大学生？

塔子 うん。

桐沢 昨日から、ただの大学生がここに？

塔子 うん。なー、由利くん。

桐沢 え、なんで？

塔子 なんてって。…あたしが好きやからやろ！

由利 はあ〜…。

夕美 …あーらー…。男前…。

塔子 やってー。よかったなー、由利くん。

由利 はいはい。

塔子は由利の頭をなでる。

夕美と桐沢は、ぼう然とその様子を見る。

桐沢 塔子さん。

塔子 はい？

桐沢 い、いやあー！ビックリしますよおー！塔子さん、そーいう男性がチャントいたんですねえ！

塔子 うん。まあね。

由利 いやいや。違うよ。

桐沢 いやあのね、しょーじき、塔子さんにはそんな男性いるわけないって思っていましたよおー。や、これ僕だけの見解じゃなくてね、同僚全体、つつーか、ひいては会社全体の、見解つつーかね。

塔子 え？

由利 会社全体って…。

桐沢 いやいや、ほんとなんですよ、由利さん。この塔子さんって人はね、相当そんなイメージなんですよ。男性の影がないっていうかね。ありえんやろ！っていうね。

塔子 え、そうなん？

桐沢 ほら。気付いてない。もー、ちょー鈍感なんすよ。この塔子さんは。僕に告白してきたときもね、僕「よー言えたわー」って思いましたもん。なんでそんな言えるねんーって。ほんま。逆におもしろかったですよ。自分のことしか見えてないからね、他人がどう言ってるか全然知らないんですよ。

由利 ああ。

桐沢 「ああ」、ってわかります？わかるんすか？「ああ」って。ふーん。あ、もひとつね、この塔子さん。会

社ではね、まったく仕事出来ないんですよ。

塔子 え、そんな今言わんでいいやん。

桐沢 まっつったたく、っすよ。まっつったたく！何やらしてもおっそいし、間違うし、なんも特技あらへんし、残業せーへんし。何やらしても、っすよ！？普通ね、これは出来るけど、これは出来へん、みたいなね。適材適所っていうかね。…ないんすよ。この塔子さん、適所、ないんすよ。

由利 は、はあ。

桐沢 あ、知らなかった？やっぱり知らなかったでしょ。もー、塔子さん自分の都合のいいことしか言わないんすから！

塔子 ええー…？もう、いいやん。

桐沢 そうですよ！塔子さんはほんま、そんなんですわ！

塔子 そんなん…って。

桐沢 例えば、入社した春。…ねえ、夕美さん。

夕美 え？

桐沢 入社した春ですよ、夕美さん。

夕美 あ、ああ。…あの、はじめまして。これから、一緒にガンバるな。

桐沢 会社の同僚の、夕美さん。

塔子 あ、うん。でもあたし、この仕事腰かけ程度にしか考えてへんから。

夕美 え…。

塔子 すぐやめたらごめんやで。

夕美 う、うん。

桐沢 そんな言わんと、とりあえず始めだけでも「頑張るー！」とかは言うときましようよ。

塔子 あ。でもあたし、嘘はつかれへんから。

塔子はティッシュで鼻をかみ、その辺にポイツと捨てる。

夕美 ポカーン。

桐沢 これが、塔子さん。

夕美 桐沢さん、あたし、あんな人とうまくやってけるか心配やわあ。

桐沢 あ、夕美さん。塔子さん、一人でお弁当食べてますよ。

夕美 塔子さん、あたし、ここ、座らしてもらっていい？

夕美 …え？

由利 あれ？

塔子 な、何言ってるの？

夕美 き…桐沢さん？

桐沢 そんな女が僕以外に理解されるなんて、おかしいですよーっ！

由利 …塔子さん、変な人に好かれるな…。

夕美 あ、あの、桐沢さん？

桐沢 僕から心変わりするなんて、おかしいんですよ！

夕美 あの、桐沢さん！

由利 修羅場や。

塔子 …い・や・や。桐沢さん。

桐沢 ……………！

桐沢は部屋を飛び出す。

夕美 き、桐沢さん！

夕美もあとを追う。

由利 …わー。

塔子 なー、由利くん。

塔子は由利のそばに座り、由利の頭を抱く。

由利 これはエライことや。

由利は折り紙をはじめ。

由利は想像する。

揺れる飛行機の機内。

桐沢と夕美がいる。

桐沢は無理やり窓を壊そうとしている。

そこから飛び出すつもり。

夕美はそれを必死に止めている。

とうとう桐沢は飛び出し、夕美はその窓の外に向かって、叫ぶ。

相変わらず散らかっている、塔子の部屋。

塔子はいない。

由利がいる。

由利は首輪をつけていない。

部屋の中を自由に動いている。

冷蔵庫からジュースを取り出す。

それを飲む。

それから、窓のそばへ行き、空を眺める。

ジュースを飲みながら眺める。

飛行機が通る。

由利は目で追う。

窓から身を乗り出して追う。

そうしていると、玄関チャイムが鳴る。

由利は無視している。

声　　ゆ、ゆりくん？

由利は「あ」と気付く。

由利　　ああ、開いてるでー。

誰かが入ってくる。

女子。

大きなスケッチブックを抱えている。

牧　　由利くん？

由利 おし。

牧 だ、大丈夫？

由利 うん。大丈夫やで。入りや。まだ半分帰ってけーへんから。

牧 う、うん。

牧は靴を脱いで入ってくる。

牧 由利くん。大丈夫？

由利 え？だから大丈夫って言ってるやん。

牧 あ、そうじゃなくて、なんか、されてない？嫌なこととか。

由利 ああ。別に。

牧 ほんまに？ああ、良かった。ここ。年上の女の人のうちやんな。

由利 うん。そう。

牧 ああ、由利くん。気づけてな。野バラくんも待ってるから！

由利 え？なんであいつが出てくんの？

牧 あっ！別にあたしが言うことちやうかつたな！

由利 …？持ってきた？

牧 あ、うん。

牧はかばんから携帯ゲームをとり出す。

(ニンテンドーDSのようなもの)

由利 ああ、よかった。

由利はそれを受け取る。

牧 こんなだけでいいのん？

由利 うん。とりあえず。暇でしゃーないねん。

牧 そっかそっかー。

由利 牧ちゃん、連絡してくれてありがと。携帯のメモリ全部消されてもたから、どーしようもなくて。

牧 ちょうど良かったんやな。ああ、良かった。

由利 うん。ちょうど良かった。

牧 あたしもな、ちょうどテスト終わったところで。

由利 あ、そっか。そんなくらいの時期やんな。で、牧ちゃんの用事ってなんやつけ？

牧 あ、あいな。由利くん、また、ちよつとモデル、して欲しいねん。

由利 あ、また？

牧 うん、いつもごめんな。

由利 ううん、別に。

牧 しかもこんなところで。

由利 ううん。すげー暇やから、逆にちよつどいい。

牧 良かった。さっき、野バラくんにもしてもらって。ほら。

牧はスケッチブックを由利に見せる。

由利 うわー。結構過激なポーズやん。アホやな、あいつ。

牧 うん。野バラくんが受けやからな。

由利 受け？

牧 うん。由利くんが攻めやからな。

由利 攻め？

牧 うん。あつーそっか。あの、由利くんが、野バラくんの上になって、こう…(くんずほぐれつ)…みたいな。
な。

由利 ええ？

牧 いつも神様に感謝してるねんけど、こんな美少年カップルがちよつと同級生にいるなんて、すごいことやと思ってるねん。

由利 カップルって。

牧 あの、由利くん、描かせてもらっていい？

由利 う、うん。それは別に。

牧 由利くん。ちよつと、こう、して。(何やらポーズをとる)

由利 こ、こう？

牧 うん。素敵。

由利 ……そやけどな。あの、野バラとか別にそんなんちゃうからさ。何より男やん。

牧 ……うーん？（描いている）

由利 あんま妄想しないでさ…。

牧 ……うーん？

由利 ……まあ、いいか。…最近の俺もそれしかしてないし。

牧は一心不乱に描いている。

由利はヒマだ。

由利は想像してヒマを紛らわす。

由利は無理やり折り紙をはじめめる。

飛行機の機内。

男が2人座っている。

その2人はなにやらいちやっついている。

スチュワーデスが横を通る。

珍しそうにやたら眺める。

由利 ああ！やおおい！

牧 え？

由利 あ、いや…用語を思い出した。

牧 ……うん、それ。

牧は恥ずかしそうにする。

由利 出来た？

牧 う、うん。一応。

由利 見せて。

由利は牧のそばに近寄り、スケッチブックをのぞき込む。

牧は由利に唐突に近寄られ、鼓動が大きくなるのを感じた。

牧 …えつと…。

由利 うまいなあ、牧ちゃん。

牧 え？

由利 いつも思うけどな。うまいなあって。

牧 あ、ううん。そんな…。

由利 いいなあ、こんな才能あつて。

牧 そんなこと、ないんやで。あの。ただ、描きたいものが…あるから。

由利 それが、俺と野バラ？

牧 う、うん…。

由利 変わってるけどな、そこは。

牧 由利くん。あの…また、描かせてな？

由利 ああ、うん。全然いいよ。

牧 …由利くん。ここ、いつまでおるの？

由利 さあ。わからん。

牧 わからん？

由利 おねえさんの気が済むまでちゃう。

牧 ええーっ。それ何？

由利 まあ、捕らわれの身やから。

牧 でも、由利くん、今出れそうじゃない？

由利 ああ、そういえば、外し方わかってん。首輪。鍵なしで！

牧 じゃあ…。

由利 …うーん、でも急にいなくなるって、なんか悪者みたいじゃない？

牧 え？

由利 うーん。まあ、いいんちゃう。

牧 え？

由利 もうちょっとくらい、いいやん。

牧 え、それ、どういう…。

由利 そんな必死になって逃げんでも、別に。出たくなったら出たらいいし。

牧 ええー…。

由利 牧ちゃんもたまに来たら？ここ。

牧 ええー？……うん、…そうやんな…。別に危害加えられてるわけじゃないみたいやし…。

由利 うん。そうそう。

牧 わかった。また、ここ、来る。…なんか、ごめんな、変な空気作って。

由利 そう？また連絡してや。あ、今度、なんか新しいソフト買ってきて。

牧 うん。…じゃあ、行くわ。

由利 うん。

牧は立ち上がり、玄関の方へ行く。

玄関を開けると、そこに咲倉が立っていた。

牧 わあっ！

咲倉も急に扉が開いてびっくりしたようで、慌てて去る。

びっくりしたときに荷物を落として去る。

牧 え？誰…？

由利 気にせんでいいよ。ここのおねーさんのおとーさんか、もしくは管理人さん。

牧 ?なにそれ。

由利 さあ。よーわからん。

牧 ?これ、どうする？(咲倉の落としていった荷物)

由利 あー。入れとくわ部屋。貸して。

牧 うん。

牧は荷物を玄関に置く。

牧 紙？

由利 うん。俺の暇つぶしアイテムのひとつ。

牧 え？

由利 手持ちぶさたでさ。

牧 ふーん：そうやんな…。じゃ、またすぐなんか持ってくる。

由利 うん。ありがとう。

牧は出ていく。

入れ替わりに、桐沢が入ってくる。

桐沢 あれ？由利くん。

由利 ああ、桐沢さん。

桐沢 さっきの、誰ですか？女の子。

由利 牧ちゃん？俺の友達。

桐沢 友達？

由利 うん。

桐沢 おいおいー。そら大変や。

由利 え？

桐沢 僕、ちょっと事情説明してきますわ。

由利 え？そんなんしなくていいですよ！

桐沢はさっさと行ってしまう。

由利 ……なんやねんなー。扉も閉めんと。

由利は扉を閉めに立ち上がる。

扉を閉めるときに、外で何かを見た。

由利は急いで部屋のいつもの一角に座る。

首輪をつける。

ちょうどそのとき、玄関が開く。

塔子 タダイマー！

由利 あ、塔子さん。

塔子 由利くん、タダイマー！待ってた？ごめんなあ、遅くなってもて。

由利　むしろ日に日に帰って来るん早くなってない？

塔子　うん。早退した。

由利　ええ？いいの？こんな毎日。

塔子　いいのいいの。優先順位がはっきりしとるから。

由利　そんなんでいいん、仕事って。

塔子　うわ。またこれ。(咲倉の紙)

由利　うん。来はったで。よっぽど気に入られてるねんなあ。

塔子　え？勝手に入って来たん？

由利　え？

塔子　由利くん、入れたん？

由利　…あ。

塔子　由利くん、届くん？玄関まで。

由利　…いや…。

塔子は由利を立てせて、ロープが引つ張るまで、壁から離す。

塔子　…ギリギリ無理って感じやんな…。

由利　…あー…。

塔子　…もしかして、合鍵？管理人やし？

由利　あ、そうかもな。

塔子　…えー…やめてー…。

塔子はげんなりする。

由利はどうしようかと迷う。

塔子が持つて帰ってきた袋に目が留まる。

由利　あ、塔子さん。これ、何？

塔子　え？ああ、ゲーム。由利くん暇やって言ってたから。

由利　えっ、まじで？

塔子　うん。

塔子は得意げに袋を開ける。

由利 …なにこれ。

塔子 え？

由利 オセロとか。人生ゲームとか。…一人で出来へんやん。

塔子 えー？いいやん、あたしとすれば。

由利 暇つぶしにならんやんー。

塔子 えー。いいやん、あたしと遊ぼうやー。

由利 はあー…。

塔子 あと、シュークリーム。食べへん？デバ地下で何がいいかなーって悩んでんけど。結局シュークリームにしてみた。

由利 そんなところも寄って来たん？

塔子 どうしても由利くんとおいしいもの食べたくて。あ、でもお茶入れな。

由利 入れて来たら？

塔子 でも…。(離れたくなさそう)

由利 …塔子さん…。

塔子 え、なにになに？

由利 …ダメな感じやな…。

塔子 えええー？(相当ダメな感じ)

由利 はあー…。

塔子 んー、でも素敵なティータイムを過ごしたいし、お茶入れてくる…。

由利 うん。

塔子はししぶしぶ立ち上がり、台所の方へ行こうとする。

塔子 あれ？

塔子は窓の近くに置いてあるジュースの缶に気付く。

塔子 あたし、これ飲んだっけ。あれ、まだ入ってる。

由利 あ。

塔子 由利くん？

由利 え？

塔子 これ、由利くん飲んだ？

由利 ううん。

塔子 そうやんなー。こんなとこまでヒモの長さないもんなあ。

由利 うん。

塔子 あれー？

由利 塔子さん飲んでたで。

塔子 ええー？そやったっけ？

塔子はそれを冷蔵庫の方へ持っていく。

塔子 あれ？

塔子はそのあたりに放置されている携帯ゲームを見つける。

由利 あ。

塔子 これ、なに？

由利 え？さあ。

塔子 ええー？えー…？

由利 ……。

塔子 あ。桐沢さんかなあ。こないだ来たとき。

塔子は納得する。

由利 …ああ。

塔子 困るなあ。勝手に置いてったりして。

由利 こんな散らかってるのに、そゆのは気付くんやなあ。

塔子 当たり前やん。あたしの部屋やねんから。こんなん見たことないし。困るなあ。あたしの知らんうちにこんなん…。あ、あたしが知らんうちにまだなんか変わったことあるんちゃうの？嫌やなあ。…ここは、あたしと由利くんの、2人の世界やのに。

由利 ……。

塔子は携帯ゲームを見つめてなにやら考える。

そのとき、玄関チャイムの音。

激しく鳴る。

塔子 あ、また誰か来た。…ハロー！

塔子は玄関を開ける。

女が勢いよく入ってくる。

これは、塔子の母、愛子。

愛子 塔子！

塔子 えっ？か、母さん？

愛子 塔子！あああ！あたし、もう生きてかれへんわあ！

塔子 ええ？ど、どうしたん、母さん。

愛子 あの人、あの人、あたしのこと、もう好きじゃないって…。

塔子 あの人って？

愛子 あの人やん。塔子も一回会ったやろ。

塔子 どの人よ？

愛子 え？コクヨの人やん。

塔子 コクヨ？…もう、どの人がどれかわからんわ。

愛子 ああ…。もう、あたし、人からは愛されへん子なんやわ…。

塔子 そ、そんなことないやん…。母さんほど愛される人、見たことないわ…。

愛子 そんなことない！

愛子は玄関先でしくしく泣く。

由利 とりあえず、あがってもらったら。

塔子 あ、そ、そうやな…。あの、母さん。

愛子 あがっていいのん？

塔子 う、うん。あがり…。

愛子 ありがとう…。

愛子は部屋を見る。

愛子 相変わらず汚いお部屋やけど…。

愛子は勝手に入ってくる。

愛子 あららー…。足の踏み場もあらへんわ。あー、くちやいくちやい。

塔子 あがらしたったのに…。

愛子 あら、塔子。お母さんのことは、いたわらなあかんで。

塔子 な、なんでいたわらなあかんのさ…。

愛子 無条件や。それが、ママンや。

塔子 は？そんな…。

愛子 あー、なんてとこ。まるで、地獄やわ。あたしにはお似合いやわ。

塔子 あー母さん、靴！靴！靴、脱いで！

気付くと、愛子は靴のまま部屋に入ってきている。

愛子 あらら、こんなところでも靴ぬがなあかんの？えらいことやわ。

塔子 あ、当たり前やん…！

愛子 はあ、ヤレヤレ。

愛子はしぶしぶ靴を脱ぐ。

部屋に入り、見渡す。

愛子 はあゝ…。…あら。

当然、由利を見つける。

愛子 塔子。

塔子 え、なに？

愛子 あちらの、かわいらしい方は？

塔子 え？…あ。あ、由利くん…。

愛子 あらあらあら。

由利 どうも…。

愛子 あらあらあらあら。

愛子は由利に近づく。

塔子 ちよ、ちよつと…。

愛子 はじめまして。塔子の母です。

由利 は、はい…。由利です。

愛子 愛子です。

由利 は、はあ。

愛子 まあまあ、塔子がねえ。あの、塔子が。とうとうあの子も女になったのやねえ。塔子はねえ、非常にうっとうしい子でねえ。人に愛されへん子やったんよー。

由利 え、そうなんですか？

塔子 …ちよ…。

愛子 そうよー。出来たときから間違いやったわね。あの子、父が誰かわからんのよ。

由利 …え？

愛子 そうなんよー。あたしがね、チョット恋多き娘やったから☆

由利 …はあ。お母さんのせいですか。

愛子 愛子です。

由利 …愛子さん。

塔子 …ちよ、かあさ…

愛子 塔子がおなかに出来たとわかったら、その多き恋がバタバタと終わりを告げて、あたしはひとりぼっちになつたんよ…。ああ、思い出すだけでとても寂しいわあ。

由利 でも産んだんですね。

愛子 信じたくなくて放置してたら、勝手に産まれて来たのよ。

由利 …えええ…。

愛子 そのとき、あたしは新たな恋を育てるために必死で、必死で好きな人のところに通っていたんよ…。…こ
う、重い体を支えて、なんてことないフリをしながら。こんなおなか、ないも同然のような顔して。働き
もせず、部屋が荒れ放題の男の家で、せめてと掃除、炊事とおうちのお仕事やってましてん。そしたら、
急にもう無視できへんほど痛—くなってきた。ううう！って。うううううう！ってうづくまってしも
うてん。ああ、もうこの暖めかけた恋も終わらんかかって、ぼんやり思ったわあ。男は、ちよつと離れた
ところでテレビ見てたわ。あたしは男とテレビからちよつと離れたところで、うううううう！ってなあって。
でも「あたしに気付かんとして！」って思ってた。そればかり思ってた。男はずつと振り向かんかった
わ。あたしは、そのまま、その部屋の隅で、うううううう！うううううう！って、塔子を産み落としたん
よ。

由利 ……。

愛子 その男とはそれ以来連絡とれへんくなったわ。

由利 …は、はい…。

愛子 塔子。そんなときからほとんど泣けへん子でなあ。憎たらしい子やったで。例えば参観日とかな。

小学校の塔子 おかーさんは、家にあんまりおらへん。おつても寝てる。うらやましい。あたしには、おとーさ
んがいつぱいおる。「おとーさんって呼びや。」ってよく言われる。他の子にはそんないつぱいおとーさん
がおらんからチョット得した気分になる。でもおとーさん、みんなあたしのことを怖い目で見る。だから
おかーさんは、怖い目をあたしが見んでいいように、「外で遊んでき」って言う。だから嬉しい。

由利 それ、嫌味ですか？

愛子 そんな子やから当然いつつもひとりではってなあ。自分でその状況招いてるのに気付いてはらへんのか
なあ。

由利 …さあ…。

愛子 あ、そういえば、塔子も色気づいたときがあつてな。高校生の時、男の子家につれてきはってんやん。

由利 はあ。

愛子 次の日には、あたし、その子とつきあつてたわ。

由利 …えー…。

愛子 だって、好きになってもてん…。

塔子 …母さん。

愛子 そのときも、結局その子は他の同級生のところに行ってもた…。

塔子 そら…年の差も…。人の母やし…。

愛子 こんな塔子の母親やからかなあ？あたしは、いつでもいつでもこんな風に成就せーへんねん…。

愛子はまたしくしく泣く。

愛子 なあ？由利くん？どう思う？

塔子 ちよっ…！母さん！由利くんはあかん…！

そのとき、不意に壁の穴が開く。

咲倉 あ。

三人は穴を見る。

咲倉は慌てて閉めようとする。

塔子 あ！咲倉さん！

咲倉 …えっ？

塔子 ちよっと、上がって行ってくださいよ。

咲倉 …ええっ？

塔子 いいから。

咲倉 えええ？えええ？

塔子は部屋を出ていき、咲倉を連れて来る。

部屋に上げる。

咲倉を愛子の隣に座らせる。

塔子 咲倉さん、母です。

愛子 しくしく…。

咲倉 あ、ど、どうも…。

愛子 しくしく…。

咲倉 ど、どうしたん…？

塔子 …さあ…？

塔子は由利のそばに座る。

咲倉 あ、あの…。か、紙…。どうですか…？

塔子 ああー。あんまり、必要ないんですけどね。

愛子 しくしく…。

咲倉 あ、どんな紙…好きですか？

塔子 どんなつて…。別に…。紙に好きとか嫌いとか…。

愛子 しくしく…。

咲倉 あ、どんな匂い、好きですか？

塔子 ええ？いや…。

愛子 しくしくしく…。

咲倉 ……。

咲倉は話を中断される愛子のしくしく声に少々イラッと来る。

咲倉は腰の紙束の紙を吟味する。

愛子をなだめるために、しぶしぶ一枚やる。

咲倉 これ。

愛子 え？

咲倉はその紙で、愛子の涙を拭く。

愛子 えええ？

咲倉 機嫌直しなさい。

愛子 …え？

愛子は紙をしげしげと見る。

咲倉 そ、それで、塔子さん。

愛子 ありがとうございます。

愛子は咲倉の方を振り向く。

咲倉 え？

愛子 ありがとうございます。えっと…。

塔子 咲倉さん。

愛子 ありがとうございます、咲倉さん。

咲倉 あ、は、はい。

愛子 愛子です。

咲倉 え？あ、は、はい。

塔子は「ヨシッ」と思う。

由利 親子誕生？

由利は折り紙をはじめ。

由利は想像する。

飛行機の機内。

旅行に行く途中のような愛子、咲倉、塔子の親子。

幸せそうな普通の親子の風景。

そこに、もう一人来る。

サツキが来る。

愛子と咲倉はサツキに駆け寄り、かわいがる。

塔子は一人になる。

幸せそうな親子の風景、愛子、咲倉、サツキ。

一人で窓の外を見る、塔子。

ちよっと前の話。

由利の、大学からの帰り道。

いつもこの部屋の下を通っていた。

由利はこの部屋の下で、この部屋を見上げる。

由利 あ、あの人、また窓開けてビール飲んでる。…いつも一人やなあ。…女の人がいつもひとり。悲惨やなあ。

「美人やのに」と、心の中で思う。

この部屋の窓際に塔子がいいて、窓を開け放している。

塔子はビールを飲んでいる。

由利はその塔子を見ている。

牧 話しかけてみる？

由利 …ええー？嫌やわ。

牧 オトコノコとか、喋ったことない、薄幸のオーエルさんかなあ。

由利 ほんま、そんな感じするわ。

牧 潤いあげたら？

由利 ええー？気持ち悪い。

牧 ……そうやんな。わかってる。だって由利くんは…。…フフフ。(妄想している?)

由利はその塔子を見ながら、部屋の下を通りすぎる。

別の日。

日曜日の昼。

由利はまたこの部屋の下を通る。

由利 あれ。昼間からいてはる。…休みやのに、行くところもないんやなあ。ほんま悲惨。

部屋の窓際には塔子がいる。

塔子 あれ？

塔子は由利の方を見た。

由利は慌てて、塔子よりもっと上の空を見上げる。

塔子は由利の視線の先が気になり、追う。

そこには、たまたま飛行機が飛んでいる。

塔子 飛行機。

由利は通り過ぎるまで飛行機を見ている。

塔子も、通り過ぎるまで、飛行機を見ていた。

飛行機が通りすぎると、由利は慌てて部屋の下を走って行った。

塔子はその由利を目で追う。

そしてまた空を見上げる。

塔子 あ、また。…ここ、よく飛行機通るんやなあ。…知らなかった。

塔子は飛行機が通り過ぎるまで、見ていた。

由利は妄想している。

飛行機の機内。

そこに塔子がいる。

その隣に、由利が座る。

2人で飛行機に乗っている。

塔子は窓の外を見ている。

由利は缶ビールを二本持っている。

ひとつを開けて、塔子にやる。

2人は缶ビールで乾杯する。

★★★

塔子の部屋。

塔子はいない。

由利が寝ている。

咲倉がいる。

咲倉は鼻歌などを歌いながら、部屋の中を物色している。

咲倉はダンスの中から、塔子の洋服を取り出す。

それを広げて見たりする。

それを鏡の前に持って行き、袖を通す。

鏡の前で何やらポーズをとってみたりする。

ひとしきり見てから、咲倉はそれを脱ぐ。

ダンスのもとあった場所にしまい、また別の服を取り出す。

同様に広げて見、また袖を通す。

鏡の前で自分の姿を見る。

何やら満足そうにする。

部屋を見渡し、床に落ちているマニキュアを拾う。

色を見る。

違うようだ。

それを床に置き、別のものを探す。

また違うマニキュアを見つめる。

色を見る。

それを開ける。

慣れない手つきで楽しそうに爪に塗る。

そのとき、誰かがドアのノブを開ける音がする。

咲倉は慌てる。

咲倉 あわわ…。わー。わー。

開けて、入ってきたのは、サツキ。

咲倉 あっ、サツキ！

サツキは咲倉の姿を見る。

サツキ おとーさん。

咲倉 は、はい。

サツキ 何してんの？

咲倉 え、や。え、いや…。えっと。あの、…か、管理。

サツキ その服。

咲倉 え、あ…！えっと…。

サツキ おとーさん！

咲倉 えっと…。

サツキ もういいわ！

サツキは部屋を出て行く。

咲倉 えー…。

咲倉は部屋に取り残される。

咲倉 …あー…。

そのとき、声が聞こえる。

愛子 あれれー？戸、開けっ放し。

愛子の声がして、玄関に入ってくる。

咲倉

あつ。

愛子

あららー！

咲倉

え、え、えつと…。

愛子

咲倉さん！どうしはったんー！あららー。どうしよー！

咲倉

えつと…。

咲倉は慌てる。

愛子はいそいそと靴を脱いで入ってくる。

愛子

咲倉さん。嫌やわー。そんな待ち伏せみたいなん。あたし、いつ来るかなんてわからんやんー？

咲倉

え、あ、はい。すみません。

愛子

結構待った？

咲倉

え、いや、あの…：チョット。

愛子

いやー！ごめんなあー！ありがとうー！

咲倉

いやいやー。

愛子

咲倉さん、やっぱりあたしら、ナンカあるんやと思うねん。

咲倉

エ？

愛子

今日なんて、約束なんてしてへんやん？

咲倉

う、うん。

愛子

それが偶然出会うわけやん？

咲倉

う、うん。

愛子

何か、運命的なものを感じてしまうねん…。

咲倉

う、うん。え？

咲倉は恐縮する。

愛子

あ、ごめん。咲倉さん。そんな、怯えさせるつもりじゃ…。

咲倉 あ、う、うん。

愛子 ただ、あたしの気持ちを…。

咲倉 う、うん。

咲倉は怯えている。

愛子 どうしよう…。…あ。

愛子は、咲倉が塔子に届けていた紙を一枚とりだす。

それを咲倉に見せて、ゆっくりと紙ヒコーキを作る。

咲倉 あ。

愛子 えいっ。

愛子は紙ヒコーキを部屋の中で飛ばす。

咲倉 あ、あ。

2人は紙ヒコーキを目で追う。

それから、紙ヒコーキは落ちる。

咲倉はその紙ヒコーキを取りに行く。

愛子 なごんだ？

咲倉はその紙ヒコーキを広げて、一生懸命のぼす。

愛子 あれ？

咲倉 もうー！

咲倉は怒っている。

愛子 ……ごめん。

そのとき、玄関の戸が激しく開く。

2人は驚いてそちらを向く。

牧 ……由利くん!!!

突然牧が入ってくる。

牧はいつものように大きいスケッチブックを持っている。

牧 由利くん!…由利くん!

愛子 シーツ。寝てはるよ。

牧 ……由利くん!…由利くん…!

牧は構わず入ってくる。

スケッチブックを床に放り投げる。

由利に近づく。

愛子 どないしはったん。そんな寝てる人起こすもんどちやうよ。

牧 あなた、誰ですか。

愛子 あたしは、この住人の母ですけど。

牧 えええっ!?

愛子 な、なんやのん?

牧 あなた、娘さん、おかしいですよ!?

愛子 え?

牧 純真な大学生を拉致った揚げ句、あああああんなことや、こここここんなことや…!強要してるんですよ!?

愛子 え、なんの話ですか?

牧 聞いたんです。聞いたんです!聞いたんですもん!由利くんは、そんな男の子じゃないんです!もっと、

純粋な世界にいます！年上の女とそんな…！そんなことするような、そんな男の子じゃないんです！

愛子　なに、なに？どうしはったん？

牧　由利くんの純潔が…！由利くんの純潔が…！

愛子　どうしはったん、かわいそうに。そんなに混乱して。

咲倉は、牧の持っていたスケッチブックを覗く。

（紙が気になった様子）

咲倉　うえっ。

咲倉はスケッチブックを放り出す。

愛子　どうしたん、咲倉さん？

愛子もスケッチブックを見る。

愛子　まあ！

牧　あっ！返して！

牧はスケッチブックを奪う。

愛子　…それ、由利くんやんね？

牧　…そうですけど？

愛子　…上手やねえ。

牧　…どうも。

愛子　…あの。由利くんて、そういう…趣味の人？

牧　趣味じゃないです！これが一番純粋な世界なんです！

愛子　それって、あの…男色っていうそういう…。

牧　違います！愛です！

そうしていると、由利が起きる。

由利 うるさ…。

牧 由利くん！

由利 あ、牧ちゃん。来てたん。

牧 由利くん…！出よう！

由利 え？

牧 ゆ、由利くん！逃げようよー！

愛子 ゆ、由利くん、こんにちは。

由利 あ、愛子さん。

愛子 由利くん、あなた、そういうケの人やったん？

由利 へ？

牧 美しいねんな、由利くん。由利くんは、美しいものしかいらんねんな？

由利 どうしたん、どうしたん、牧ちゃん。

愛子 あらー、人のそういう部分って、見た目からはわからんもんやねんなあ。

由利 ええ？牧ちゃん、愛子さん何言うてはんの？

由利は牧の抱えているスケッチブックに気付く。

由利 あ。

由利は牧からスケッチブックを奪い、中を見る。

由利 …わー…牧ちゃん…。

牧 だって、これが由利くんの美しい世界やろ？

由利 愛子さん、違うんですよ。これ、牧ちゃんの妄想で。

牧 妄想？

由利 そうやで、何回も言うてたやん。俺、普通の男子やから。野バラは、ただの友達やから。

牧 …でも。

愛子 その子、由利くと塔子の深いこと聞いて、混乱してはるみたい。

由利 え？でも野バラ、彼女おるん、知ってるやろ？

牧 …でも…。

由利 牧ちゃん。どうしたん。野バラが彼女おるん知ったとき、そんなうろたえへんかったやん。普通やろ？俺も男やん？

牧 だって、由利くんは、そんな女の人に惑わされへんねん…。

愛子 なんやー。妄想かいなー。びっくりするわあ。

由利 もー、牧ちゃん。なんでそんなにうろたえてんの？

牧 だって由利くんは…。

由利 なんで、俺だけなん？

牧 ……なんで…。

由利 そうやん。だって、野バラには彼女おるやろ？

牧 うん…野バラくんは女の子と手つないでた…。

由利 やろ？

牧 でも、由利くんは違うやろ？由利くんはほんとに純粹…。

由利 ええ？野バラは汚い？

牧 ……うん。

由利 ほら。俺も同じやん。

牧 で…でも…由利くんは、女の人とそんなせーへんねん…！

由利 なんでー？

愛子 ……あ。由利くんのこと、好きなんじゃないの？

由利 え？

牧 ……え？

愛子 塔子にヤキモチやいてんちゃうの？

由利 ……え？

牧 ……え？…そんな…。

そのとき、勢いよく玄関の戸が開く。

塔子 ちよつとー！

咲倉 ……あわわ…！

愛子 塔子やないの。

塔子 なんてあたしの部屋にこんないっぱい人がおんの！？

由利 塔子さん、まだ昼間やけど。仕事は？

塔子 あたしのいない間にあたしと由利くんの部屋がどうなってんのか気になって、どうしても仕事なんかしてられへんかったの！

由利 ええー…。

牧が、唐突に由利に抱きつく。

由利 牧ちゃん？

牧 そうかも…！

塔子 ちよつとー！！！！

塔子は牧をひっぺがす。

牧 な、なに！？

塔子 あんた、誰！？

牧 …若くてかわいい大学生！

塔子 はあ！？

牧 あんたより！若くて！かわいい！大学生！

塔子 そんなん聞いてんちやうねんけど。

牧 由利くんのこと、ずっと前から知ってる女子大生。

塔子 ふーん。

牧 由利くんのこと、あんたより前から知ってる女子大生！

塔子 それがなんなん？

愛子 その子も由利くん、好きやねんて。

塔子 …ふーん？

塔子は憤慨している。

愛子 塔子、あんたはほんまに、貧乏くじやなあ。あたしの子やからかなあ。

咲倉が塔子に近寄る。

塔子 なに！？

咲倉 あ、あの。匂わせてもらっていいですか？

塔子 はあああー！？

愛子 ええっ？咲倉さん？

塔子は咲倉を見て気付く。

塔子 あれ？その服。

咲倉 …あっ！

塔子 それ、…もしかして、あたしの…？

愛子 咲倉さん、あの、あの子、あたしの娘やで。あたしも同じ匂い、するで。

塔子は咲倉に近寄り、服をつかむ。

塔子 あたしの服…！

咲倉 え、…あ…。

愛子 な、なあ、咲倉さん？

塔子 …！あたし、物よくなくなあって思ってたんやけど、それって、あたしがなくしてたわけじゃなくて

…！それって…！

咲倉 あ、…えっ…いや、あの…。

愛子 ほら、あたしも、いい匂い。

塔子 ……！！なんなん！？ここは！？

その時、玄関の戸が勢いよく開かれる。

サツキ おとーさん！

咲倉 サツキ！

愛子 え？

サツキが部屋に入ってくる。

手にハサミを持っている。

サツキ おとーさん。

愛子 オトウサン？

咲倉 サ、サツキ…ハサミ…。

サツキ おとーさん。来て。

咲倉 えっと…。

サツキ 来て！

咲倉 …は、はい…。

サツキ …こんなん、切ったげる。

サツキは咲倉の来ている塔子の服をつかむ。

咲倉 サツキ？

サツキ 今度から、こんなことしてしまっただとしても、全部切っていったげる。おとーさんの呪縛と一緒に切っていったげる。

愛子 おとーさん…。おとーさんって。咲倉さん、おとうさんなん？

牧 由利くん…。

牧は由利に近寄る。

咲倉 あ、あの、匂わせてください。

咲倉はサツキの手を振り払い、塔子の腕をつかむ。

サツキ おとーさん！

サツキは父を抱きしめる。

愛子 あたし、あたしもここに引越してくる…！咲倉さん、あたしも引越してきます…！

愛子は懇願する。

塔子は先ほどから動けない。

由利はみんなを見ている。

布の切れる音が聞こえてくる。

サツキが咲倉が着ている塔子の服を切っている。

咲倉 あ。

みんな、その切れていく布を見る。

由利 あー…ヒラヒラ落ちてく。

切れた布が落ちていく。

飛行機が通る音がする。

由利 あ。

由利は窓の方を見る。

塔子も見ると。

サツキ …はい、終わり。

咲倉 …わあー。

咲倉は床に落ちた布に興味を示す。

床に落ちている布の切れ端を掴んで持ち上げる。

ハラハラと落とす。

咲倉 重力ー。

とか言いながら遊ぶ。

由利 いっぱい落ちたなあ。

由利もその咲倉の手の布を見る。

塔子 みんな、出てって…。

みんなは塔子の方を振り向く。

塔子 出て行ってよ。ここ、あたしの部屋やねんから！

サツキ …言われんでも、出ていくわ。…行く、おとーさん。

咲倉 あ…。

咲倉は布を持つ手を引っぱられる。

サツキは咲倉の手を引いて出ていく。

愛子 さ、咲倉さん…！入居手続き…！

愛子も追って出ていく。

牧 由利くん…。

塔子 触らんとって！

牧 …。

由利 牧ちゃん、また連絡するから。

牧は何も言えず、出ていく。

塔子は勢いよく戸を閉める。

由利 塔子さん。

塔子 由利くん。

塔子は由利の近くに座る。

塔子 あたし、もうこの部屋から出て行かへん。ずっとここにおる。ずっと。由利くんと一緒におる。あたし、

ずっと由利くんを見てるから。由利くんも、あたしだけおったらいいやろ？

飛行機の通る音。

由利は窓の方を見る。

塔子 なあ、由利くん。

塔子は由利のひざまくらに頭を寝かす。

由利は、咲倉の持って来た紙で折り紙をはじめめる。

由利 …落ちていく。飛行機から、人が落ちていくの見える気がする。人が、ハラハラ落ちていくの見える
で、塔子さん。

由利の頭の中で、墜落しかけの飛行機から、人が落ちていく。

わーわー聞こえる。

由利 …引力に逆らわれへんみたいやわ。

塔子 あたしにかかる引力は由利くんや。引っ張られてる。甘い、甘い日常に引っ張られてくわ。

2人だけの部屋で、2人だけの日常が始まる。

塔子の部屋。

部屋の一角に相変わらず由利がつながれている。

塔子もいる。

あと、塔子の会社の同僚の夕美がいる。

夕美　塔子さん、塔子さん。塔子さん、やるよなあー。こんなあつさり。

塔子　え？

夕美は塔子の部屋のあちこちを見ている。

由利は紙を一枚拾って、それを折ったり広げたりしている。

夕美　仕事辞めるっていうのはな、なんか想像つくんやけど。その理由がまさか、…だ、男性…とはね。

塔子　まさかって。

夕美　あたし、塔子さんでもっと心ない人なんかと思ってたんやで。

塔子　え？

夕美　恋とかせーへんような。

塔子　そんな。

夕美　だって、いつも自分のことばかりやん。

塔子　え。そうかな。

夕美　そんな人が誰かのことを思ったりするー？ましてや恋なんて。

塔子　…するよ。

夕美　塔子さん、ほんまに恋してはんの？

塔子　え？

夕美　あ、この置き物カワイイ。

塔子　あ、それ。まだあったんや。駅のゴミ箱で拾ったやつ。

夕美　えっ…。

夕美はそつと戻す。

夕美　へえー…。

夕美は床に落ちていたタオルでそつと手を拭く。

夕美　と、塔子さんてシユミいいよなあ…。これやー思ったら…その、拾ってくるとか。…フツ―はそんな

考えられへんやん。

塔子　色が良くて。

夕美　…へえー…。あ、なるほどー。あの子も男前やもん、なー。

塔子　え？

玄関のチャイムが鳴る。

夕美　あ、桐沢さんちやう？

塔子　え？

夕美が玄関を開ける。

桐沢　やー。すみません、遅くなって。

夕美　ああもう、桐沢さん。いいんよー。ごめんなー。運ばせてもて。

桐沢　…。

桐沢は冷たい目線で夕美を見る。

夕美　え？

桐沢　ほんま。ちよつとくらいは持てるでしょーに。いくら女性とは言えね。

夕美　え、でも…。桐沢さんがひとりでいいって…。

桐沢　そんな一応ひとこと気使っただけですよ。まさか本気にするなんて。困った人やなあ、夕美さん。アハハ…

桐沢は、箱を持って入ってくる。

塔子 ……ありがとう。

夕美 ア、アハハ…。ご、ごめん…。

桐沢 遅くなってすみませんでしたね、塔子さん。

夕美 と、塔子さんから電話かかってくるまで、スツカリ忘れててんー。ごめんな、気づかんで！

塔子 あ、…いや。

桐沢 結構ありましたよー。塔子さんの私物。

桐沢は箱を部屋にどかっと置く。

塔子 あ、そやったー…？

桐沢 僕から見たら必要なさそうなもんばんっかりでしたけど。や、僕から見たら、ですよ。僕から見たら。

夕美 あたしから見ても、やけど！

夕美は笑う。

桐沢は冷たく夕美を見る。

夕美はその視線に気付いて笑うのをやめる。

夕美 ……塔子さん。あたしら、今度旅行行くねん。

塔子 え？

桐沢 え？夕美さん？

夕美 言っちゃった。ウフ。行くねんなー？北海道。飛行機で。

由利が夕美の方を振り向く。

桐沢 それ、だいぶ前に決めたことじゃないですか…。

夕美 だいぶ前でも、決めたやん。

桐沢 いやー…。今は別にもうそういう気は…。

夕美 あたしな、初めて、飛行機乗るねん。珍しいやろーあたし？

由利 俺も乗ったことない。

夕美 あ、そうなんー。

桐沢 あれ、由利さん。珍しいですねー。今どき。怖いですか？

夕美 怖いよな。機械が空を飛ぶなんて。

桐沢 ちゃんと飛ぶ原理があるんですから。不思議じゃないんですよ。もう、子供じゃないんですから。

由利 あの中に、いっぱい人が乗ってるんやんなー…。

由利は窓を見る。

夕美 狭いとこギューギューにやで！よー、浮かぶわあ。

桐沢 みなさん夢見がちですねー。あれはもつと現実的なもんなんですよ。

由利 塔子さん、のど乾いた。

塔子 え…あ、そう。冷蔵庫にお茶あるよ。

由利 つながれてるんやけど。

夕美 あのー。いれたげはつたらー？

塔子 え？

夕美 お茶、入れてあげてーな。ついでにあたしらの分もー！ウフフ。

塔子 ああ。…うん、わかった。

夕美 あ、その前に、トイレ借して…。

塔子 うん。どうぞ。あっち。

夕美 ありがと…。

夕美はそちらの方へ行く。

塔子は冷蔵庫からお茶を取り出す。

コップを4つ用意し、入れる。

桐沢 あ、僕、いりませんわ。

塔子 そう？

桐沢 一つのお茶かわかりませんし。

塔子 ああ、いつやろ。

由利 おとといのや。

桐沢 おとといか…。だいぶ微妙ですね。

塔子 おとといやったら全然いけるやん。

桐沢 夏ですからね？それより塔子さん。

塔子 え？

桐沢 僕、気持ち変わってないですから。

塔子 え？

桐沢 前は、「イヤヤ」と言われましたけど。

塔子 なんのこと？

桐沢 僕とつきあう話です。

塔子 夕美は。

桐沢 ああ、どうでもいいですよ。もう別れますから。

塔子 へ？

桐沢 気変わったらいつでも言ってくださいね。

塔子 え、ちよつと…。

桐沢 まあ、塔子さんが仕事辞めるーとかアホなこと言う理由が彼やというのは知ってますけどね。そんなのはただの盲目やということに気付くときは来ると思うんで。

塔子 ……。

桐沢 ほんま、塔子さんはバカなんで。

塔子 そうやけど。

塔子はお茶の入ったコップを持ってきて座る。

由利はそれを取る。

桐沢は飲まない。

そこへ、夕美が帰ってくる。

夕美 ……塔子さん。

塔子 ああ、夕美。

夕美 あと若干掃除して…。

塔子 え？あ、うん。

夕美 …うん。

塔子 あ、お茶どうぞ。

夕美 …うん、やっぱいらん。

塔子 あ、そうー？

夕美は黙って桐沢の隣に座る。

塔子と由利はお茶を飲む。

桐沢と夕美はそれを見る。

夕美 ……。あ、そうそう。お土産、なにがいい？

塔子 おみやげ？

夕美 北海道旅行の。買ってきたげる。

桐沢 夕美さん。行きませんよ。

夕美 (塔子に) なにがいい？

桐沢 分かんない人ですね。行かないって言ってるのに。

夕美 …行くもん。決めたもん。

桐沢 ああ、じゃあもう一人で行ってください。

夕美 …え？

桐沢 塔子さん、ひどいですよねえ。僕行かないって言ってるのに。

塔子 え？

夕美 …どっちよ、ひどいの…。

桐沢 勝手もたいがいにしてくださいね。

夕美はテーブルのお茶を一気に飲む。

4人は沈黙する。

桐沢 塔子さん。そろそろおいとまします。

夕美 ……。

塔子 あ、…荷物、ありがと。

桐沢 また、来ます。

塔子 …あ、うん。

夕美 また来ます！

桐沢 ……はいはい。

2人は部屋から出ていく。

部屋には塔子と由利。

塔子 ……行ってもた。

由利 すごいことになってるね。

塔子 ……そうやね。

由利 怖いなー。

塔子 お茶くらい自分で入れたら。

由利 つながれてるんですけど。

塔子 ……。それでも。

由利 無茶やなあ。

由利は先ほどから手の内で玩んでいた紙で紙ヒコーキを作っていた。

それを塔子の方へ飛ばす。

塔子 ……なにそれ。

由利 いいなあ。飛行機乗れて。

塔子 ……こっから出ーへんから。

由利 そういうこと言うてるんちゃうねんけどなー。

塔子 出ーへんからね。

由利 わかってるよ。塔子さん、さっきの、こっち飛ばして。

塔子 ……。

塔子はそうしない。

由利 ……いいけどさ。

塔子はお茶を飲む。

由利は手元に置いてあった本を読みはじめ。
寝そべったまま、だらしない格好で読む。

塔子 ……。

由利 ……。

塔子 なに、読んでんの？

由利 ……んー？宿題ー。

塔子 ……。

由利 ……なに？

塔子 ちゃんと座って読んだら。

由利 えー？

由利は姿勢を正す。

2人は沈黙する。

由利は近くにあった掛け布団を引っ張る。

座布団代わりにそれを敷く。

塔子 それ、掛け布団。

由利 え？

塔子 そんな上に座るもんちゃうの。

由利 ……ああ。

由利は布団をよけて座る。

由利は本を読みながら、手持ちぶさたに近くにあった紙を手取る。

それを折ったり開いたりする。

(メイン本読み。サブ折り紙。)

塔子 なにしてんの。

由利 え？

塔子 なんか、折ったり広げたり。折ったり広げたり。

由利 え？ああ。あ、またやった？これ、癖になってもた。手持ちぶさたで。

塔子 気になるんやけど。ピラピラピラピラ。

由利 え？……塔子さん。さっきから……

言いかけてやめ、折り紙をはじめる。

由利は妄想する。

由利 なに怒ってるの？

塔子 だって。

由利 だって、どうしたん？

塔子 あたしのことかまってくれへんし。

由利 そんなことかよー。

塔子 そんなことつてー。

由利 心の中ではずっとかまってるやんー。

塔子 心の中とかわからんやんー。

由利 わかったわかった。ゴメンゴメン。

塔子 由利くんー。

由利は自分の妄想のバカらしさに、思わず笑う。

塔子 なに。

由利 え？

塔子 なに笑ってるの。

由利 え？いや、……。いつからやっけ。こんななってんの。

塔子 ……。誰のせいで。

由利 え？……俺のせい？

その時、携帯電話の着信音。

塔子は慌てて自分の携帯を見る。

鳴っていない。

由利の方をハッと見ると、由利が一生懸命手を伸ばし、由利の携帯電話を取った。

由利 はいはい。

塔子 あっ…。(シマッタ)

由利 ああ、牧ちゃん。

塔子 え…。

由利 ああ、うん。うん、全然いいよ。気にせんといて。…うん。…うん。大丈夫やって。…え？あ…うん。
うん、いいよ。おいでおいで。

塔子 え？

由利 うん。分かった。じゃあ、また。(電話を切る)

塔子 …由利くん。

由利 ー？

塔子 「おいで」とか言うてた？

由利 うん。牧ちゃん来るって。近くにおるんやて。

塔子 なんて？

由利 なんてって。話したいことがあるって言うから。

塔子 なんて？なんて？

由利 え、何がやのな。俺出られへんねから、来てもらわなしゃーないやん。

塔子 なんて、あんなこと言うた牧ちゃんを呼ぶの？

由利 あんなことって？

塔子 だから…あの…。

由利 …ああ。牧ちゃん。俺のこと好きとか言うてたなあ。

塔子 …！！！！！！！！

由利 びっくりしたな…。…え、そのこと話に来るって？

塔子 そうじゃないの！？

由利 そうなんかなあ。塔子さん。どうしよ。

塔子 どうしよって。そんなん、あたしに聞かんといて！

由利 えー、でもー。

塔子 あたし、由利くんのこと、好きやねんからね！

由利 えー、そんなんけんか腰に言われても…。

塔子 だって…。

由利 牧ちゃん、そんなこと考えてるなんて全然気付かんかったなー。めっちゃ意外。もちよつとちやんと喋らんとあかんなあ。人は。

由利はなにやら納得して満足する。

塔子 ……それで牧ちゃんと会うの？

由利 え？うん。牧ちゃんかわいそうやし。

塔子はいきなり由利に近寄る。

そして、由利の頬を叩く。

由利 ……え？

由利はわけがわからず、塔子を見る。

塔子 ……あ…。

塔子も我に返り、狼狽する。

塔子 ……由利くんのせいやから。

塔子は由利から視線を外し、離れる。

へたりこむ。

塔子 ……。

手が痛い。

由利 …え？

2人は黙る。

2人とも、それぞれに、混乱している。

そこへ、玄関チャイムの音。

2人は動かない。

しばらくして、玄関の戸が開く。

牧 あ、コンニチワ…。

由利 …え、あ。ああ、牧ちゃん。

牧 由利くん。コンニチワ。…大丈夫？今。

由利 あ、ああ。うん。うん。あがり。

牧 お、おじゃまします…。

牧は塔子の方を気にしながら入ってくる。

牧 ごめんな…突然。

由利 うん、いいで。

牧 あ、あんなんじゃないなくて、ちゃんと話したくて…。

由利 うん。

牧 (塔子の方を気にしながら) あ…。

由利 うん。気にせんという。大丈夫。

牧 うん。由利くん。あたしな、あたし…。

由利 うん。

牧 あたし…もう、妄想すんの、やめるから。

由利 うん。

牧 由利くんでお話し作ったりすんの、やめるから。

由利 う、うん。

牧 もう、コミケで由利くんの話の本、売るのがやめるから。

由利 え？う、うん。

牧 さつき、野バラくんにも会って、ちゃんと言うてきてん。

由利 え？なにを？…う、うん。

牧 野バラくんの思いには、負けへんから、って。

由利 え？思い？…う、うん。

牧 あたしだって、野バラくんに負けへんくらい、由利くんが…。好きやから、って。

由利 いや、何回も言うてるけど、野バラはちゃんと彼女おるからね？…う、うん。

牧 あたし、全然麗しくないし、野バラくんには劣るけど。

由利 いや、もう性別の時点で大丈夫。…う、うん。

牧 でもあたし、頑張ってJJとか買って、オシヤレするから。

由利 う、うん。

牧 一緒に歩いて恥ずかしくないようになるから。

由利 う、うん。

牧 だから、だから、…あたしの方も見て欲しい…。

由利 …うん。

牧 由利くん…。

由利 牧ちゃん…。

牧と由利は言葉をなくす。

言うことを探す。

塔子は2人を見つめる。

由利 牧ちゃん。

そのとき、玄関の戸が開く。

愛子 塔子！。いるー？

桐沢 いるでしょー。お母さん。

愛子 アハハ。そうやんなあ。もうある種立て籠もりやもんなあ。

桐沢 ろう城ですよ、ある種。

愛子 ある種な！アハハ。あ、塔子。おったん。

桐沢 だからいますよー。(笑う)

牧も由利も塔子もそちらを向く。

愛子 あら、お客さん？

牧は会釈する。

愛子 ああ、あの子か。

愛子と桐沢は部屋に上がる。

桐沢 塔子さん。さっき、お母さんに会いまして。お母さん、同じマンションに住んでるんですね。

愛子 最近な。塔子。この桐沢さんて人、エエ人やわー。あんた、エエ人に好かれてるやないの。やるなあ、塔子。

桐沢 いやいやー。そんなこと、ないですよー。

塔子 桐沢さん。

桐沢 え、はい。

塔子 桐沢さん、つきあいます。

桐沢 え？

塔子 あたし、桐沢さんとつきあいます。

桐沢 え？

愛子 あらー、エエことやわー。あたしも嬉しいわー。

塔子 ここに、住んでください。

桐沢 エッ？

牧 そしたら……由利くん！

塔子 それは、あたしのペットと違って。

牧・桐沢・愛子　ええ？

塔子　あたしのペット。一緒にかわいがって。

牧　ええ…？

塔子　（牧に）あたしのペット、あげへんよ。

塔子は鋭く牧をにらむ。

牧　……………。

牧は耐えきれず部屋から飛び出す。

桐沢　いいですよ。

塔子は由利を見る。

由利も塔子を見る。

由利は折り紙をはじめ。

由利は妄想する。

落ちてゆく飛行機の機内。

牧が窓のそばにいる。

無理やり窓を開ける。

牧が、窓の外へ飛び降りる。

塔子の部屋。

由利が部屋の一隅につながれている。

部屋の真ん中に机。

食事が並べられている。

その食卓を囲んでいるのは、塔子と桐沢。

2人は食事をしている。

部屋はいつもの塔子の部屋らしくなく、きれいに片づいている。

桐沢 どうですか、塔子さん。

塔子 …うん、おいしい。

桐沢 それは良かった。

桐沢は上品に食事をする。

桐沢 明日はフレッシュが安いみたいなんで、あっちまで行ってきますね。

塔子 うん。

桐沢 帰り、ちょっと遅くなりますけど、心配しないで。

塔子 うん。

桐沢 明日はサカナにしてみますね。

塔子 うん。

桐沢 あ、その小鉢も食べてください。

塔子 うん。(食べる)

桐沢 どうですか？

塔子 うん、おいしい。

桐沢 それは良かった。

塔子は鼻がむずむずする。

塔子は近くにあったティッシュを一枚とり、鼻をかむ。

かんだあと、丸めてその辺にポイッと捨てる。

桐沢 ……。

桐沢が、それを拾い、ゴミ箱に捨てる。

桐沢 風邪ですか？

塔子 ううん。ただむずむずしただけ。

桐沢 それならいいんですけど。

塔子 桐沢さん、料理も出来てすごいね。

桐沢 そうですか？普通ですよ。

塔子 そんなことないやろ。

桐沢 僕は、塔子さんが出来へんのがおかしいと思いますよ。

塔子 ……出来へんわけじゃなくて、したくないだけ…。

桐沢 しなかつたら同じです。

塔子 ……そうかな。

桐沢 まあ、僕をすごいって思うのは、際限なく思ってくれたらいいんですけど。(笑う)

由利は紙ヒコーキを折っている。

一枚折っては、また一枚。

次々に折っている。

玄関チャイムが鳴る。

桐沢 はいはい。

桐沢が席を立つ。

塔子は変わらず食事を続ける。

由利はその塔子を見ている。

桐沢が戸を開けると、そこには咲倉がいた。

桐沢 ああ、咲倉さん。

咲倉 あの…。これ…。

咲倉は袋に入った大量の紙を差し出す。

桐沢 え？

咲倉 これ…塔子さんに…。

桐沢 これ、なんですか？（袋の中身を見る）紙ですか？

咲倉 かみ。ちよつと、粹な加工してみたから。

桐沢 粹な加工？…（見てみる）切り刻んでるだけですやん。

咲倉 もとはいい紙。

桐沢 いい紙？

咲倉 いい匂い。

桐沢 匂いー？？？

桐沢はあからさまにげんなり顔をする。

咲倉 （袋の中から一枚取り出す）手触りも。

桐沢 はあ？…もう、わかりました。わかりました。いらなから。いらなから。

咲倉 え？

桐沢 いらなから。持って帰ってください。

咲倉 でも、きみにあげるんじゃなくて、塔子さん…。

桐沢 塔子さんもいらなから。

咲倉 塔子さん…。塔子さん！

桐沢 いらなから。

咲倉 …悪い奴や…!!ぺっ!

咲倉は桐沢に向かってつばを吐く。

桐沢 うわっ！

咲倉 塔子さん、これ、どうぞ！

咲倉は言い放って、玄関に紙束を置いて出ていく。

桐沢 あいつ…！

塔子 放つといたら。

桐沢 でも、あいつ、僕につばを…！

塔子 桐沢さんが咲倉さんになんかしたんやろ。

桐沢 してませんよ！見てたでしょ！

塔子 でも、怒ってはったやん。

桐沢 僕も怒ってますけどね！これ、なんなんですか！？

塔子 紙やな。

桐沢 見ればわかりますけど。

塔子 おすそ分けしてくれんの、いっつも。いらん言うてんのに。

桐沢 おすそ分けって…。こんな切り刻まれた紙、どうするんですか？

由利 えっ？

塔子 え、切り刻まれてる？。

桐沢 え？はい。

塔子 へえー。

塔子は紙を見る。

由利が手を伸ばし、その袋の中の紙を一枚取る。

桐沢 おい…。

由利 あっ…。(ほんまや、折られへんやん。)

由利はポイツと捨てる。

桐沢 ……。

桐沢はそれを拾ってゴミ箱に捨てる。

由利 (今までのんでええわ。)

由利は押し入れをそっと開け、そこから切られていない紙を一枚取り出す。
そのとき、扉が開いて、愛子が入ってくる。

愛子 コンバンハ。

桐沢 ああ、お母さん。

桐沢はとりあえず紙を脇へ置いておく。

愛子 あら、桐沢さん。上がらせてな。

桐沢 どうぞどうぞ。

愛子 あらー、きれいになったなあ、このお部屋。

桐沢 でしょー？

愛子 あれ、もう、ご飯食べてた？

桐沢 はい。

愛子 ああー、そうなんかー。

桐沢 あ、まだありますよ。食べて行きます？

愛子 ちゃうねんちゃうねん。あたしも持って来てあげてん。お豆さん。

桐沢 あー。それは残念ですねえ。

愛子 ほんまー。

桐沢 明日食べますよ。いただきます。

愛子 そうー？

桐沢 ありがとうございます。

桐沢は包みを受け取る。

それを冷蔵庫に入れる。

塔子は何も言わず黙々と食事を続けている。

愛子 あれ、これ。(紙のこと)

桐沢 ああ。なんか持ってきたよ。咲倉さんが。

愛子は袋に近寄る。

愛おしそうに触る。

愛子 ああ…ええなあ…。

桐沢 どうしたんですか？

愛子 これ…塔子がもらったんやろ？

桐沢 はい。

愛子 ええなあ…塔子…。ええなあ…。

愛子は愛おしそうに紙を触る。

桐沢は不思議そうにその愛子を見る。

塔子は食事を続ける。

由利はその様子を見ながらヒコーキを折る。

玄関チャイムが鳴る。

桐沢 …あ、はいー。

桐沢が開けると、サツキがいる。

桐沢 あ、娘さん。

サツキ …愛子さん、来てますか？

愛子 あ、サツちゃん。

サツキ 愛子さん。やっぱりここだったんですね…。

愛子 どしたん、どしたんサツちゃん。

サツキ いや、何でもないです。

愛子 そんなことないやん。サツちゃん、泣きそうな顔して。どうしたん。

サツキ …やっぱりほんとの娘さんの方がいいんやって…。

愛子 サツちゃん、サツちゃん。何言ってるの。サツちゃんほど大切な娘、いーひんよ。

サツキ 愛子さん…！

愛子 サツちゃん…！

サツキ じゃあ、愛子さん、あたしのために、働いてくれる？

愛子 え？

サツキ うち、家賃収入しかないねん。

愛子 う、うんうん。

サツキ でも人居者少なくて。

愛子 う、うんうん。あ、ほらでも、あたしもここに引っ越してきたから。これでちよつとは…！なあ！？

サツキ ううん。ううん、あかんねん。そんなもんじゃないねん。あたし、来年大学行きたくて…。

愛子 う、うん。

サツキ 今のままでは…。

愛子 う、うん…。

サツキ だからな、ここに住まなくていいから、住み込みでも働きに出てくれる！？

愛子 ええっ！

サツキ それくらいせんと…。あたし…。

愛子 サ、サツちゃん。サツちゃん。なんとかなるよう。そんなん。

サツキ ほんま！？愛子さん、なんとかしてくれる！？

愛子 うん、考えてみるわ。

サツキ 愛子さん…！

愛子 だから、一回おとーさんとも話し合おっか。

サツキ ……。

愛子 ……。な？

サツキは愛子のそばにある紙束の袋を見る。

サツキはその袋の中の紙切れをひとつかみ掴む。

愛子も袋を自分の方へ引き寄せ、紙切れをつかむ。

2人は同じ袋の中の紙切れの山の中に手を入れる。

サツキ そうやなあ。

愛子 じゃあ、サツちゃんち、行こっか。

サツキ …うん。行こう、愛子さん。

愛子 サツちゃん、ご飯食べた？

サツキ ううん、まだ。

愛子 じゃあ、あたし、お豆さん炊いたから、それ、食べよっか。

サツキ うん。食べる。

愛子 桐沢さん、さっきのん返して。

桐沢 えっ。あ、はい。はい。

桐沢は冷蔵庫からさつきもらった包みを出す。

愛子は受け取る。

愛子 ほんじゃあ、行こ。サツちゃん。

サツキ うん。

2人は名残惜しそうに紙から手を放す。

そして2人で手をつないで出ていく。

反対の手はひとつかみの紙を持っている。

2人が出ていく跡を紙がパラパラと落ちていく。

桐沢 あ、塔子さん。この紙、押し入れ入れときますよ。

塔子 別にどこでも。

桐沢は袋を持って由利に近寄る。

由利の背後の押し入れを開ける。

そこに袋を入れる。

由利は出ていった2人の方を見ていた。

由利 …業が深い。

由利はまた、紙ヒコーキを折る。

由利は妄想をはじめる。

落ちていく飛行機の機内。

サツキと愛子が乗っている。

飛行機は揺れて、2人ともふらふらしている。

その中で、2人は支えあう。

とも見える。

2人はお互いを押し合い、開いた窓から落とそうとしあっている。

サツキ あたしの代わりに落ちーや…！

愛子 なに言うてんの…！あんたこそ…！

由利は2人のやりとりを妄想する。

桐沢 塔子さん。

塔子の部屋で、桐沢が塔子を呼び、塔子を背後から抱きしめる。

由利は妄想から現実に戻される。

塔子と桐沢を食い入るように見る。

塔子 なに、いきなり。

桐沢 塔子さん…！

桐沢は塔子を自分の正面に向かせ、改めて抱きしめる。

塔子 ……。

桐沢　塔子さん……塔子さん……！

塔子は抱きしめられながら、由利の方を見る。

由利も塔子を見ている。

2人は見つめあう。

桐沢　塔子さん……塔子さん……！塔子さん……！

玄関の戸が勢いよく開く。

入ってきたのは夕美。

夕美は抱きあっている桐沢と塔子を見る。

2人は夕美を見るが離れない。

それから、部屋に土足で入ってくる。

塔子　土足。

夕美は手に高枝切りバサミを持っている。

夕美は由利を見据える。

塔子　え？

夕美は高枝切りバサミを由利に向ける。

塔子　由利くん！

由利　え？

夕美は高枝切りバサミを操作して、切った。

切ったのは、由利をつないでいる、ロープ。

由利　え？

由利をつないでいたロープがだらんとなる。

塔子　由利くん…！

塔子は桐沢を振り放し、由利に近寄る。

塔子　由利くん、由利くん、大丈夫？

塔子は由利に近寄るが、由利はさっと避ける。

塔子　え？

由利の首にロープがだらんとなっている。

由利はもう動ける。

由利は塔子を見下ろす。

塔子は由利を見上げる。

塔子　由利くん…。

由利はしばらく塔子を見ていたが、さっと身を翻し、この部屋から出ていく。

塔子は由利が出ていった扉を見つめる。

何が起こったのかと考える。

塔子は急に涙が込み上げる。

塔子　由利くん………！！

塔子は泣く。

すごく泣く。

わけがわからないが、泣く。

塔子 行ってもた。由利くん、ほんまにすぐ行ってもた。イヤやったん？この部屋、イヤやったん？

塔子は由利のつながれていた場所に行く。

だらんとなったロープの切れ端を手取る。

塔子 耐えてたん？

それから、桐沢を見る。

塔子 あたしら2人を見てた、由利くん…。

桐沢は塔子の様子にお構いなしにまた抱きしめる。

桐沢 …塔子さん！

夕美は目をそらす。

塔子 由利くんは、視線をそらすことなく…見せられてたんやんな…。

桐沢 塔子さん…！

泣く塔子。

その塔子を無理やり抱きしめる桐沢。

目をそらして苦々しい思いをしている夕美。

由利が戻ってくる。

由利 塔子さん。

3人はそちらを見る。

塔子 ……由利くん。

由利は、自分のつながれていた場所に近寄る。

押し入れを開けて、ダンボールを取り出す。

それを持って、塔子と桐沢に近づく。

ダンボールを床に置き、桐沢を塔子からどける。

桐沢は塔子から離される。

由利はダンボールを再び持ち、塔子の頭の上で逆さにする。

ダンボールから、大量の紙ヒコーキが落ちてくる。

塔子の頭に大量の紙ヒコーキが降らされる。

塔子はちよつと痛い。

由利はダンボールの中身を一つ残らず、塔子の頭に降らせる。

そして、空っぽになる。

由利はダンボールを横に避けておく。

塔子 ……え？

由利 これが、俺のストレス。

塔子 ……え…。

由利 わかった？

塔子 ……え…う、うん…。

由利はもう一度押し入れから、ダンボールを取り出す。

先ほどよりは小さい。

それをまた塔子の頭上で逆さにする。

今度は、ただ紙をくしゃくしゃにしたものが大量に降ってくる。

由利 これが、みんなのストレス。

塔子 ……。

由利 わかった？

塔子 …うん。

由利 ムカついた？

塔子 え？

由利 塔子さん。

塔子 由利くん。好きです。

由利 え？

塔子 由利くん、好きです。

由利 …塔子さん。

塔子 はい。

由利 塔子さん、飛行機見に行こ。

塔子 え？

由利 空港、行こ。

塔子 え？

由利 見たいねん。行くで。

塔子 …うん。

由利は塔子の手を握る。

由利は塔子を連れて、部屋から出ていく。

夕美は、床に落ちている大量の紙ヒコーキの一つを拾う。

それを飛ばす。

飛行機機内。

塔子と由利がいる。

この飛行機は旅客機ではない。

この飛行機は、「スカイダイビング」用の飛行機。

塔子 いやー！怖いー！

由利 大丈夫やって。いっぱい講習受けたやん。

塔子 いやー！怖いってー！

由利 今更何言うてんの。もう高度何メートル？

塔子 いやいやいやー！

由利 もう、塔子さん、意外と臆病やねんなあ。

塔子 そんなん言われても…！

由利 ここまで来て飛ばんとか、もうないで。

塔子 そんなんー！このまま乗って降りるー！

由利 ええー？そんなん言わんといてやー。

塔子 うううー…。

由利 ああー、ドキドキするなあ。

塔子 由利くん、怖くないの？

由利 怖いよ、そら。でも、楽しみやん。

塔子 楽しみー？

由利 うん。ワクワクするわ。

塔子 うううー…。

由利 大丈夫やって！俺も一緒に飛ぶんやから。

塔子 でも…。

由利 大丈夫大丈夫。ずっと俺につかまっていればいいんやから。

塔子 でも…。

由利 ずつつかんどくからさー。

塔子 …でもー…。

塔子は下を見る。

塔子 あわわわ…。

由利 見んでいい、見んでいい。

塔子 ううう…。

由利 大丈夫。

塔子 由利くんー。

由利 塔子さん。

塔子 え？

由利 体験させて。俺も。落ちてく感覚。

塔子 ええー？

由利 おちてくー！つて感覚。俺もしてみたい。

塔子 ……でも…。

由利 それから、他にも。

塔子 え？

由利 他にもいっぱいいろんなこと、体験したい。なあ、塔子さん。

塔子 …エ…。

由利 な。

塔子 ……うん…？

由利 うん！よし、じゃあ行くで。

塔子 ……！

塔子は目をつむる。

由利は塔子の手を握る。

塔子もその手をしっかりと握る。

そして、2人は飛行機を飛び出す。

青い空。

白い雲。

さわやかな午後の日。

おわり